

◆平城京左京三条一坊十坪の調査 —第304次

1. はじめに

この調査は、店舗新築にともなう事前調査で、奈良県教育委員会の依頼を受け実施した。調査地は平城宮の南面東門である壬生門から230mほど南に位置し、平城京の条坊復原では左京三条一坊十坪にあたる。これまで十坪内は、第230次調査、第234-10次調査(ともに『概報1992』)および奈良市教育委員会の第219次調査(『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』)により発掘がおこなわれているが、いずれも小規模であり、十坪の性格を決定づけるまでにはいたっていない。そこで、十坪西半部の様相をあきらかにするため、条坊計画上の南北中心軸(三条条間北小路心と三条条間路心の中軸)を含むあたりで調査区を設定した。調査は1999年4月28日～7月9日にわたっておこない、面積は約900m²である。

調査区の基本的な層序は、上から耕土、床土、遺物包含層である明茶灰色砂質土、黄灰色ないし褐灰色粘質土、暗灰色微砂の順である。遺構は、基本的に遺物包含層の直下で検出している。後世の耕作などによる削平によって、南半部はすこし低くなっている。そのため、遺構検出面の標高は北半で61.9m、南半で61.8mである。

2. 検出遺構

奈良時代の遺構は、掘立柱建物2棟、掘立柱塀2条、井戸2基、溝2条、土坑1基、溝状遺構などがある。他には弥生時代後期の溝(SD7477・7478)を検出している。

SB7470 調査区北半にある桁行5間×梁間2間、南北に庇をもつ東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行、梁間、庇の出ともに8尺。柱根は残存しないが、断割調査により確認した柱痕跡の径は約9寸である。切り合い関係から後述のSE7475・7479より古い。

SA7483 SB7470の16尺東に位置する柱間3間の掘立柱南北塀。柱間寸法は両端間が11尺、中央間のみ12尺と広く取る。扉口であろう。この扉口の心とSB7470の南北心が一致することから、建物に付随する施設と考えられる。

SE7475 調査区北端にある東西3.8m×南北3.2mの井戸。井戸枠等は抜き取られていて遺存せず、掘形も抜取穴によって破壊されていてはっきりしない。

SE7479 SB7470の西妻柱掘形を壊して掘られた井戸。直径1mと小さいが、深さは遺構検出面から1.3mである。

SB7480 調査区南半にある桁行10間×梁間2間、柱間10尺等間の東西棟掘立柱建物。柱はすべて抜き取られてい

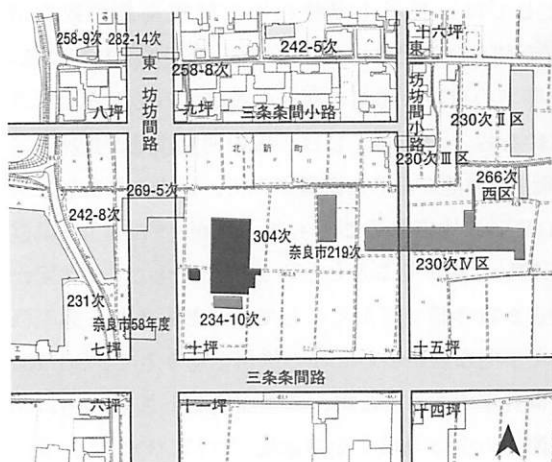


図72 調査区位置図 1:4000



図73 SB7480北東隅柱の礎板



図74 SX7481・7482(北西から)

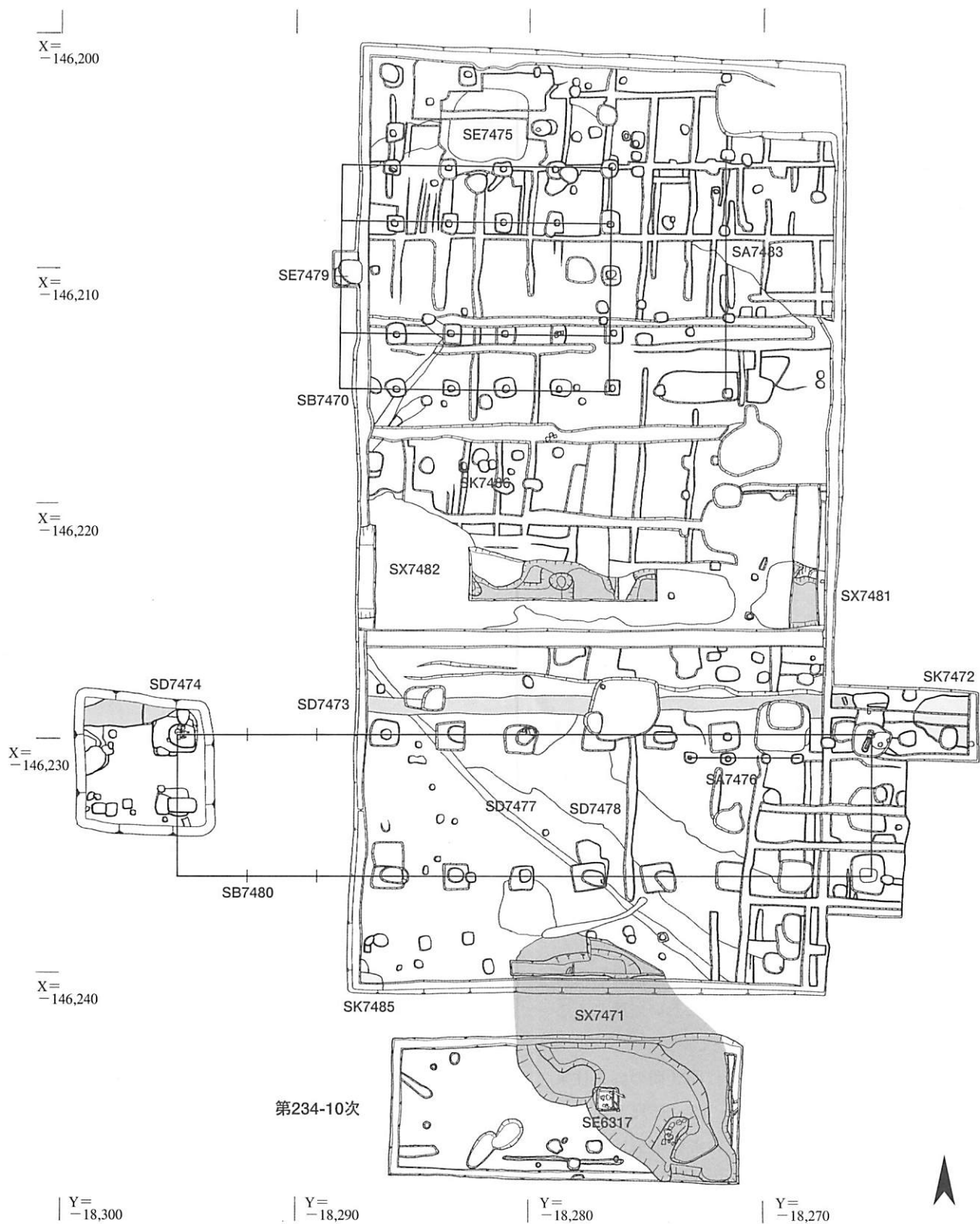


図75 第304次調査遺構平面図 1:250

て残存しないが、ほとんどの柱穴で棒状（一辺10cm、長さ60～100cm）の礎板が遺存、四隅では十字に組まれていた（図73）。礎板の方向に法則性はなく、上面の標高も61.10～61.40mとばらつきがある。

SD7473 調査区南半にある素掘りの東西溝。幅70cm、深さは遺構検出面より30cmである。その位置からSB7480の北雨落溝と考えられる。

SD7474 拡張区北端にある幅70cm、素掘りの東西溝。

SB7480との位置関係からSD7473につながるものと考えられる。

SK7472 SD7473の東延長線上にある土坑。東西3m以上、南北2.2mの楕円形を呈し、深さは25cmである。

SX7481・7482 調査区中央にある溝状遺構。その位置から十坪を南北に区画する溝の可能性もある。両者間およびSX7482内には陸橋が存在するので、厳密な区画施設ではなく、南北の行き来は可能であったと思われる。

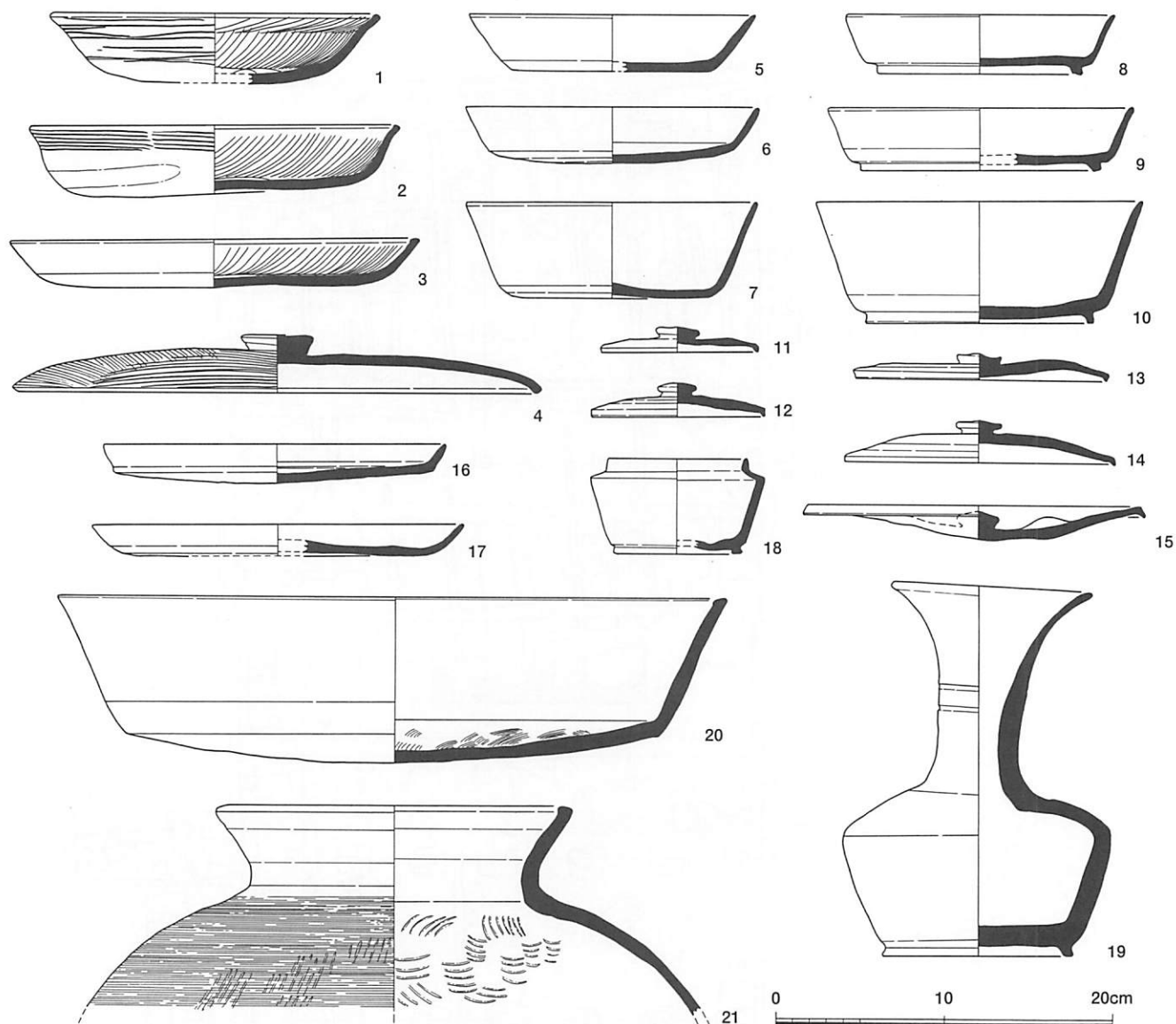


図76 SD7473出土土器 1:4

SX7471 南に近接する第234-10次調査で検出した斜行流路SD6316の北延長部分。本調査区において閉じることが判明。深さは遺構検出面から80cmである。

SA7476 SD7473のすぐ南にある柱間3間の掘立柱東西堀。柱間寸法は不規則で東から4・5.5・5.5尺となる。

SK7485・7486 調査区南西隅および中央にある土坑。奈良時代の土器・瓦片が出土している。

3. 出土遺物

木製品・金属製品・石製品 SB7480の柱穴に遺存していた礎板以外に、SX7482やSK7472から棒状の木製品が、遺物包含層から鉄鏝、砥石などが出土している。

瓦塼類 出土した瓦は表11の通りである。調査面積の割に軒瓦の出土数は5点と少なく、その時期はⅡ期後半からⅢ期前半である。ところで、SB7480北東隅柱抜取穴から隅切平瓦が1点出土、寄棟造あるいは入母屋造建物の存在を示唆している。(西山和宏)

土器・土製品 瓦塼類を除く土器・土製品の出土量は、コンテナ35箱分である。中・近世の陶磁器類と平城京に先行する弥生時代後期の土器、古墳時代後期の須恵器が若干含まれるものの、出土土器のほとんどは奈良時代前半期の土師器、須恵器である。奈良時代前半期の土器が出土した主な遺構には、SX7471、SK7472、SD7473、SE7475、SB7480の柱抜取跡、SX7481、SX7482、SK7485などがあるが、ここでは、比較的出土量の多い東西溝SD7473出土土器を図示した(図76)。ここからは、

表11 第304次調査出土瓦塼類集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦		
型 式	種	点 数	型 式	種	点 数
6135	A	1	6721	Hc	1
	Bc	1			
	?	1			
6174	A	1			
型式不明		1			
軒丸瓦計		5			
	丸 瓦		平 瓦	塼	道具瓦他
重 量	140.2kg	354.0kg	12.5kg	隅切平	1
点 数	1,160	3,085	13		

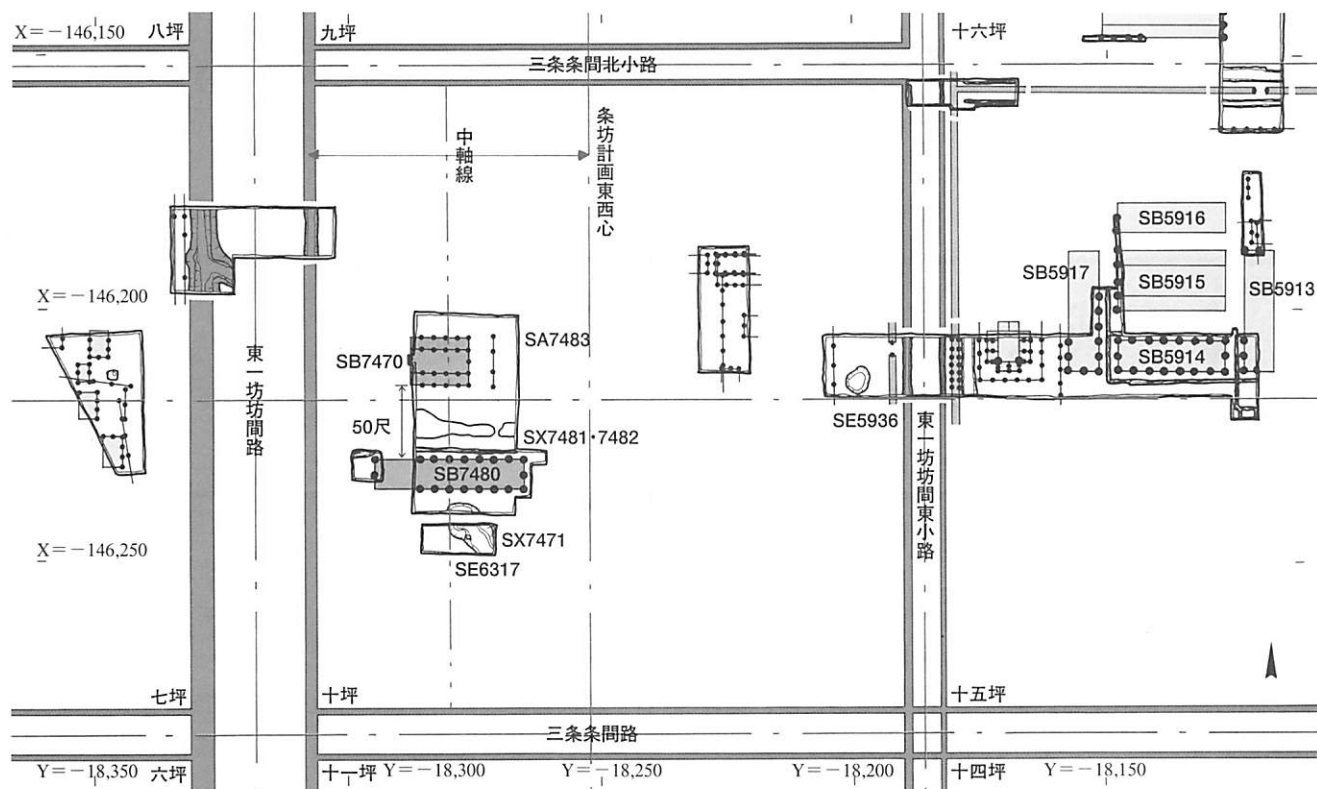


図77 平城京左京三条一坊十坪 遺構配置図 1:1500

土師器26点、須恵器64点の計90点が出土した。須恵器の出土比率が高いことと、須恵器には多様な器種を含むことが特徴としてあげられる。土師器には杯A(1・2)、杯B、杯B蓋、皿A(3)、皿B蓋(4)、小型甕、韓甕、甕A・Bがある。須恵器には杯A(5~6)、杯B(8~10)、杯B蓋(11~15)、皿A(16・17)、高杯、壺E(18)、壺K(19)、鉢A、鉢F、壺A、壺A蓋、同蓋、平瓶、盤A(20)、甕A(21)、甕Bなどがある。これらの土器は、一部平城Ⅱを含むものの、大半は平城Ⅲ古の範疇に納まる。この他に、土坑SK7486からは底部外面に墨書(文字不明)した須恵器杯B、掘立柱建物SB7480の柱抜取跡からは底部外面に焼成後「大丸」と針書きした須恵器杯A、包含層からは2個体分の蹄脚円面甕が出土している。

(川越俊一)

4. まとめ

平城京左京三条一坊は、大学寮に推定されている七坪や「内□〔匠カ〕寮」と記された木簡が出土している十五・十六坪のように、官衙的性格の強い場所であったことが指摘されている。これに対し十坪では、東端のSE5936(第230次)から「□枝宅車二両」の木簡が出土、個人の邸宅であった可能性を示す。一方、西半部のSE6317(第234-10次)からは池の存在を示唆する「西嶋」の木簡が出土、十坪が平安京において神泉苑にあたることを考慮にあれば、池をそなえた施設の存在も想定できる。

残念ながら、本調査では十坪の性格を決定するには至

っていない。しかし、西半部の様相があきらかとなり、興味深い遺構の配置など貴重な事例を追加したといえる。

桁行総長100尺のSB7480は、十坪における条坊計画上の東西心と東一坊坊間路東側溝心の中軸線上にたっている。坪全体ではなく、西側半分を意識した建物配置である。SB7470とSB7480の建物の東西心は一致しないが、SB7470に付随する施設であるSA7483を含めた東西心とほぼ一致する。さらに、SB7470とSB7480の間隔はちょうど50尺となる。以上から、SB7480とSB7470、SA7483は同時併存の可能性が強く、出土遺物から少なくとも奈良時代前半には存在していたと考えられる。また、SX7471については第234-10次調査で平城Ⅲの段階まで機能していたと報告、本調査区においてもそれを裏付けた。さらに、坪を南北に区画するSX7481・7482も同様のことがいえる。

以上から、SB7470・7480、SA7483、SD7473・7474、SX7471・7481・7482は奈良時代前半期において併存していたと考える。しかし、奈良時代後半期になると前代とは土地利用形態が異なり、小規模な建物配置もしくは空閑地であった可能性が高いといえる。

今回判明した西半部における建物配置から十坪を東西に二分する区画施設の存在が想定される。これまでの調査から東半部の状況が西半部と少々異なった様相を示すことも、その傍証となる。しかし、この施設が宅地内の区画なのか、坪を二つに区画するものかは現段階では判断できない。東と西で出土した木簡が示す十坪の性格については今後の調査に期待したい。

(西山)